よっちゃん

LI校　高等部一年一組
北川　茂那

「よっちゃん」という名前を聞くと何が思い浮かぶだろう。だいたいは、「よっちゃんイカ」だろうと思う。イカの帽子を被った小さなフィギュアだ。

私が思い浮かべる「よっちゃん」は、それとは全く違う。私が知っているよっちゃんは背丈が高く、頭を剃っている。テカテカと光っているその頭のせいで町中ではすぐ目立つ。スリムだったのが、五十すぎからお腹がぽっこり出てきてすっかり性格と同じように丸くなった。加齢臭はかろうじてまだ出ていない。ピンピンしている五十三歳の体に入ってる二十歳くらいの青年だ。

オチャメでなんでもいきなりやる。買い出しは土日の朝七時から行く。いきなり家の修理をし始めたりする。年を追うに連れ、そんな暴走は増している。奥さんからは「陸のマ

グロ」とも言われている。動きが速く、止まらない。

彼はちょっと変わっている。幼い頃から憧れていた仮面ライダーのフィギュアに一目惚れしたりする。お菓子を夜中にバク食いするのが好みだ。自分の大好きなバンドを追いかけ周り、コンサートに行ったり、ロックCDやティーシャツを集めたりもする。

「よっちゃん」のいわゆる「カッコ良さ」は普通とは違う。

一時期、「よっちゃん」はホットピンクや銀杏オレンジのジーンズを買おうとした。パンツまで明るい色を選んでいた。

「男の洋服でも女の洋服でも自分が一番心地よく、過ごせる服を着ればいい」というのが彼のアドバイスだ。

そのため、洋服を買うときには男性用品売り場に行くこともある。母は「女の子らしくない」とか却下するが、「よっちゃん」は私の好みにより沿ってくれる。「これはどうだい」

と言い、ラックにある一番明るい短パンやシャツを差し出す。スタイル的には少しずれてはいるが。

反面、ちょっとセンチメンタルなところもある。ある夜、高速道路の休憩所で車を止めた。夜空は真っ暗で星がきれいにそばかすのように散らばっていた。都会で生まれ育った私には星が見えるのが珍しく思えた。

「夜空で一番に光ってる星は、自分が一番恋しく思う亡くなった人なんだよ。」と「よっちゃん」が呟いた。ちょっぴり寂しそうな表情をしていた。

「よっちゃん」から習ったことは色々とある。行儀、作法、中でも、人への「おもいやり」は格別だ。はっきり覚えているのは、私が小学三年生のときに母が来れなかった現地校での授業参観に来た「よっちゃん」だった。懇談会の時、先生の話をちゃんと聞くのだろうかと心配だった。しかし、少しオドオドしていたが、懇談会が終わった後に、私の机の

上に手紙が残っていた。そこには「頑張れよ！」のメッセージと共に、当時私がなりたかった宇宙飛行士の絵が細かく描かれていた。「よっちゃん」はちゃんと分かっていたのだ。

「よっちゃん」は、また良い旦那さんでもある。奥さんの誕生日がくるたびに年の数だけバラをプレゼントする。さすがに五十を超えた奥さんに五十本以上のバラをあげることはなくなったが、彼女への愛は変わっていない。おっさんになってもロマンはまだ死んでないらしい。思いを込めて愛する人へギフトを贈る、これも「よっちゃん」から習ったことだ。

「よっちゃん」の本名は「よしふみ」だ。彼は、文化の日に生まれてきた北川家の長男。歴史を作ってくれるような人物になって欲しいと願いを込めてつけられた名前だ。世界的な功績は残してないけれど、信頼するにたる仲間、友達、家族には大きな歴史を刻んでい

る。

いい加減、告白しよう。「よっちゃん」は私の父だ。

親孝行が下手な私は父にどうすれば感謝の気持ちを返せばよいかわからない。父がしてくれた色々なことは、ここで述べた以上にまだまだたくさんある。だから、心を込めて、この作文を書いた。メッセージが届くといいな。

サンキュー、よっちゃん。

キャンプカウンセラー

LI校　中等部三年一組
天満　スカイラー

私は子供の世話や、子供たちに教える事が大好きなので、大きくなったら先生になりたいと思っています。この夏私は、八才の子供たちのキャンプカウンセラーになりました。この仕事をして色々な事が、将来の仕事のために学ぶ事ができました。

二ヶ月間子供の世話をして、色々な出来事や問題をどうやって解決するべきなのか、などたくさん知らなかった事を知りました。例えば、子供同志がなにか揉め事を起こしたり、ちょっと暴力的になると、できるだけ早く違う事に興味をもたせその問題事を忘れさせます。ですが子供は一人一人特徴があるので、その子供のために合う解決方法を考えないといけません。言われたことをすぐ聞いてやめる子、あばれまくって何も聞かない子供もいるので、子供によって指示の仕方を変えない

といけませんでした。私が学んだのは、よくいうことを聞かない子には、なにもかもゲームにすると、聞いてくれる事でした。例えば静かにしない時、うるさいのをやめさせるためには、「誰が一番長く静かにできるかな？」と言う質問で全員が座り、だまりこみました。とても大変だったのは、子供がやっている事にあきたらどう対応するかです。グループの子供たちは、あきたらすぐに「何時？」、「帰りたい」などと聞いてきました。これにたいして私は、ジョークを言って返事をしました。例えば、帰りたいに対して、「私はさみしいよー。」とおもしろく泣くふりをすると、子供たちは爆笑してくれました。あとは、あと何分に対して、時間をとても早くぼそっと言うと、子供たちは「えー、何々？」と楽しく追いかけてきます。このように子供たちから、たくさんの対応の仕方を学びました。

　たまにみんなあばれまくって大変ですが、やっぱりみんなとてもかわいいです。このキ

ャンプで思い出をたくさん作ることができました。キャンプの中で一番楽しかった思い出の一つは踊りです。私のグループの一人の女の子は私と踊るのが大好きでした。男の子たちがドッチボールをしている時や、公園にいる時、いつも私の手をもって踊ろうとさそってきます。二ヶ月毎日一緒に踊るのがとても楽しかったです。あと、とても楽しかった思い出は、みんなでボードゲームをすることでした。小さい子とやると、とても興奮したり、がっかりしたり色々な表情をみせてくれるのでとても面白かったです。最後に一番好きな思い出は、一人の男の子との剣の戦いでした。公園の周辺を走り回り、一時間二人でたっぷり遊んでいると、私も子供の時に戻った気分になりとても楽しかったです。

私はキャンプカウンセラーができて、将来先生になりたい私にとって、とてもいい経験になったと思います。いつか、先生になる時、私は一人一人の子供にどんな対応が一番ベス

トかが、わかるようになりたいです。色々な事が学べてとても楽しかったです。また来年もキャンプカウンセラーをやりたいです。

森の守り神

LI校　初等部六年一組
川上　聖苗

私は、今年の夏、屋久島にある白谷雲水峡の屋久杉を見てきました。屋久杉は、千年以上生きた杉のことです。私が屋久杉を初めて知ったのは、家族で屋久島に行くことを話し合っていた時でした。白谷雲水峡は、宮崎駿さんの作品「もののけ姫」の舞台となったと言われているところです。私は、宮崎駿さんの作品がとても好きで、四歳の時に見た「もののけ姫」の背景に映る大きな木を思い出しました。

白谷雲水峡でのハイキングは、新しい体験ばかりでした。ハイキングが始まって、一時間ぐらい経つと、大きな木がずらりと並んでいました。木だけでなく、大人が三人ぐらい乗れるような大きな切り株もたくさんありました。でも、私が驚いたのは、大きさよりも、切り株がくさっていないことでした。

私の庭にも大きな切り株があります。私が五歳の時に切られた木の株だと、お母さんから聞きました。その切り株は、少しくさっていて、上に乗ると、全体がふにゃふにゃしています。しかし、屋久杉の切り株は、くさっていませんでした。こんな大きな切り株が、新しく切られた株のように残っているのが、とても不思議でたまりませんでした。後から調べてみると、ウィルソン株という、四百年前に切られた、きょ大な切り株が屋久島にあることを知りました。ウィルソン株は、豊臣秀吉の命令により切られた株だと言われています。縄文杉に行く途中にあり、株の周りの長さは、十三・五メートルもあるそうです。切り株になってから四百年以上、厳しい自然の中で生き続ける切り株が存在することに、私はとても感動しました。

また、ハイキングの途中で見た七本杉と呼ばれる屋久杉は、とても迫力がありました。五階建てビルのような高さで、私の人生で見

た木の中で、一番大きい木でした。七本杉は、まっすぐに立っていて、こけが毛布のように木を包んでいました。静かに、冷静に森を見守っているようなふん囲気をしていて、私は、森の守り神のように感じました。また、平安時代から千年以上の時を生きてきたこの杉は、何を見てきたのだろうと頭の中で想像しました。

こけむすの森まで来て、みんなで休んでいる時、お父さんが、

「この絶景は、写真では伝わらない。」

と言いました。私はそれを聞いて、確かにそうだなと思いました。スマートフォンで、美しい森の写真をたくさんとっても、こけの表面のしずくや、屋久杉の太さは、実際に目で見ないと分からないと感じました。

白谷雲水峡に行った夜、私は屋久杉の長生きの理由を調べてみました。屋久島の杉は、とてもゆっくり成長し、成長しているときに、油を多くふくむようになることを知りまし

た。その油が、木を病気や虫から守り、くさりにくくしてくれるそうです。そのおかげで、通常の日本の杉の平均じゅみょうが五百年ぐらいなのに比べ、屋久杉はその二倍以上も長生きするのだそうです。私は、屋久杉の長生きの秘密を知って、屋久杉にもっと興味を持つようになりました。そして、ニューヨークに戻ってから、リサーチペーパーの書き方を練習するライティングコースに参加した時、屋久杉について書きました。

また、屋久島の森の空気はとてもおいしいと感じました。そして、森の川は、とてもきれいな水が流れていました。きれいな水の理由は、屋久島ボタニカルリサーチパークのスタッフのおじさんが教えてくれました。それは、屋久島の地形が円すいのような形をしていて、山頂に降った雨が、どこにもたまらずに、海に向かって流れているからだそうです。ハイキング中に見た川の水は本当においしそうで、水とうの水がなくなっていたら、飲ん

でたのになぁと思いました。
　私が森の中で見た屋久杉は、もののけ姫に出てくるシシ神のような、力強い存在だと感じました。また、森のこけと木のハーモニーが本当に美しくて、幸せな気持ちになりました。私は、この屋久島の森を、今のまま守り続ける方法はなんだろうと考えました。それは、私たちがごみのポイ捨てをしないように意識して、森をきれいに保つように努力することだと思います。また、ハイキングトレイルを囲うロープのさくを、絶対に越えないことも大切だと思います。なぜなら、ロープのさくを越えてしまうと、貴重なこけをふんでしまうからです。最後に、白谷雲水峡でハイキングをする時や世界遺産の場所に入る時は、寄付金を今よりもっと払うと、森のメインテナンスを支えんすることができると思います。私は、この神秘的な森の光景をいつまでも残したいと強く思いました。

五人から、ひとりぼっち

L工校　三年一組
福田　昭優

わたしは、「ひとりぼっち」と言う言葉が大きらいです。わたしがもっと小さかった時、人の数え方を知らないで、「いっぴき」と言って、お母さんや兄・姉にわらわれ、「人はひとり、ふたり」って数えるんだよ。」と教えてもらいました。ずっと前のことで、とてもなつかしいです。

今はまちがわないで数えられるようになったのに、「ひとり」と言う言葉を使いたくないのです。

きのうわたしはベットに入って、「ワンダー」と言う、お気に入りの

本を読んでいました。いつもは楽しい気分で読むのに、きのうだけは同じところに目がとまってしまって、先が読めなくなりました。なみだがポロポロと出てきて、その時お母さんが部屋に入ってきたのです。

「あや、どうしたの」。

とお母さんが聞きましたが、わたしは、「何でもない」と答えました。でも、本当は何でもなくはなかったのです。わたしは、大すきなのりみお姉ちゃんが大学に行くことを考えていたのです。そしたら、頭の中に「ひとりぼっち」という言葉がうかんできて、なみだが止まらなくなりました。わたしが生まれた時り

だったほかの三人の兄姉は、大学に行ってしまいました。前はきょうだい五人で、なかよくご飯を食べたりお出かけをしたりしました。こんどは、一番下ののりみお姉ちゃんが、大学に行ってしまうのです。

そういえば、のりみお姉ちゃんは、小学生の時は習校の文集に「妹ができた」と言う作文を書いて、とてもうれしかったと言っていたのを思い出しました。わたしが生まれてよろこんでくれたと思うと、ちょっと元気が出ました。

秋に兄姉がまた家からいなくなると、わたしはぜったいにないきます。今その日のことを考えただけで、な

みだが出てきました。お母さんは、
ないてもいいと言いました。サンク
スギビングに兄や姉が家にもどってて
きたら、
「あや、ずいぶんかしこくなったね。」
と言ってもらえるように、時々なき、
ながら、もっといろんなことをおぼ
えたいと思います。そして、わたし
が大学に行く番になった時、こんど
は兄や姉がないてよろこんでくれる
ように、がんばります。げんこう用
紙がなみだでぬれてしまったけど、
それがかわくころには、わたしはき
と新しい気持ちになれると思いま
す。
「ひとりぼっち」と言う言葉にまけ
ないような人間になりたいです。

16×16